

## 380 山梨県西部、富士見山断層の形成機序について

角田史雄（埼玉大学・教養）・山本幹雄（山梨県庁）

本断層はつきのような点から注目される：

- ① 巨摩山地と富士川谷という2つの地質区の境界部に発達する。
- ② その部分は、大きくみれば、地形の急遷点の“肩”的部分にある。
- ③ 本断層は、富士川を境にして、断層の両側の盤の運動の向きが逆になっている。
- ④ 南部フォッサ・マグナに分布する新第三系のうちでもっとも新しい（鮮新世）地層をきつている。
- ⑤ 鮮新世の地層の基盤に発達する断層系の方向や長さなどが、本断層を境にして異なる。
- ⑥ 本断層をきて発達する断層は、前述の基盤岩中の断層系のうちの1系統のものと一致するか、または、平行になる。

しかし、今までに本断層は、地形的外意激な変化という面からの考察（辻村、1926）や、断層周辺の地質構造解析からの考察（大塚、1938）がくわえられたにすぎない。その原因は、本断層の西側に分布する巨摩層群の層序と構造の解析が不十分で、本断層形成にいたるまでの地質学的復元がきちんとおこなわれなかつたためである。

筆者らは、本断層の両側に分布する地層の層序と構造の大要を把握し、一部をさらに精査している。そこで、今までの筆者らの調査から考えられる本断層周辺の地質学的復元と、それに基づいた断層形成の機構について報告したい。とくに、①鮮新世までの地層の堆積時の基盤運動の特性と、②鮮新世以後の断層運動の特性の比較検討を試みる。